

ザーラ・イマーエフの映像制作を（寄付で）支えてください

ザーラ・イマーエフ(1961年生まれ)は、2000年以來、故郷のチェチェン共和国から戦火に追われ、近隣のアゼルバイジャンに亡命を余儀なくされながら、弱者への温かい視線に彩られた映像制作と、民族や健常者・障害者を越えたボーダーレスなアートセラピー活動を強固な意志で続けています。

2003年に、アムネスティ・インターナショナル日本が、彼女をスピーキング・ツアーに招いたのも、彼女の作品の一つ、「子どもの物語にあらず」に深い感銘を受けたからでした。2003年の来日以前から取り掛かり、バクーに戻ると完成させたアニメ「春になったら」は、チェチェンの子どもたちの平和への強い願いを代弁するものでした。2004年にカザフスタンで撮影され、2012年に完成した「いって・らっしゃい」は、スターリン時代に起こった途方もない人権の蹂躪に焦点を当てながらも、知恵を働かせて、明日に希望をつないだ抑圧された人々の民族を超えた絆に光を当てています。

2004年夏から、始めたチェチェン難民の子どもたちとの創造的な歌舞・演劇活動は、地元アゼルバイジャンをはじめ、バクー在住のさまざまな国ぐにの支援者の子どもたちの参加をえて、国際アート・セラピー活動の運動体、アートセラピーセンターDidi インターナショナルに発展し、そのなかで、映像制作も車の両輪のように展開されてきました。その活動紹介「わたしたちのDidi」、チェチェン語による児童ミュージカル「お隣さん」いずれも2005年などに続いて、チェチェンからの戦争難民の女性と、ナゴルノカラバフ地方からの国内難民のアゼルバイジャン男性の愛の物語「壁に描かれた窓の家」2006年など、完成にこぎつけられた作品もあれば、撮影はできたが、仕上げは未だの作品も少なくありません。

ザーラのアートセラピー活動は、幾度となく財政的に危機に直面しながらも、多くの支援者によって、支えられ、今では、健常者も障害者もボーダーレスに参加する活動に発展しました。そして、たとえ、ザーラがアゼルバイジャンを去ることになっても活動が維持できるような仕組みが講じられつつあります。

翻って、活動の両輪の片方である映像制作では、小さな零細企業である東京シネマ新社が、さまざまな知恵を絞ってサポートを続けてきました。若干でも余裕ができたとき、制作資金の一部を提供し、制作機材を提供し、それが、「いって・らっしゃい」の完成につながり、「わたしの名はエラザ」など新作は、新しい高画質のカメラ機材での撮影となっています。映像制作活動は、製作費を切り詰めても、お金がかかるものです。ザーラ映像制作は、彼女自身が、ねん出したわずかな資金と周辺の理解者の協力で行われたものばかりです。特定の政治的な思惑を持った集団とは、一切無縁なものです。

「ザーラ・イマーエフの映像制作を支援する」という一点で、少額でも結構ですので、寄付をお寄せいただければ、有難いです。新しい制作のメディア購入、ロケ費、仕上げ費などに有効に活用させていただきます。「映像制作支援」をいただく場合、「チェチェンの子どもたち日本委員会」の郵便振替口座に「ザーラ・イマーエフ映像制作支援」と明記して入金をお願いいたします。また、eメールアドレスをお持ちの方は、ご住所欄にこれも記入していただくと、事務経費削減につながります。

振替口座番号 00180-4-765722 チェチェンの子どもたち日本委員会

集まった寄金は、ある程度まとまった時点で、送金します。寄金をお寄せいただいた時点で彼女に報告し、彼女から確認の意味も含め礼状（eメール）を出します。また、完成した作品の謝辞に寄金された方のお名前は、必ず出すことといたします。

この件についての、お問合せは：info@chechenchildren.jpn.org へ。